

権現山（こんげんやま）

権現山なんていつでも知っている人は何人もいません。もうこんな呼び名の山はないのですから……。

千手院の西、東武線路の西に小高い山があり頂上に竜蔵権現様がまつられていたので、この山を権現山と呼んでいたのです。

それは古い古いおはなしです。まだ利根川の土手も一丁位の低い時代のことなのです。利根川の河原に竜蔵坊という坊様がすみつき、住職もいなく荒れはてていた千手院の本尊様を朝な夕なおがみ信仰しておりました。その熱心さに心うたれた村人達は色々なものを坊様に差し出し、やがてお葬式の時も手伝ってもらう様になりました。ところがある日訪れて来た村人に

「まもなく水が出るから、どこか安全な所へ逃げた方がよい。」

と告げたのです。村人は

「そんなバカなことあるめい。水が出るんならあらしの時だんべ、冬に水が出るてこたあ、あるもんかね。」

と、とりあいませんでした。でも竜蔵坊は来る人、来る人に「年があけないうちに早く逃げなさい」とすすめたものですから村人達は

「竜蔵坊のやつ、気がふれたんだんべえ」という様になり、たずねてくる人もいなくなり、食べる物にも困る様になりました。でも「早く逃げなさい」という事だけは人々にいい続けました。

その年の暮、どうした事か毎日毎日雨が降り続くので、もう正月の準備どころではありません。そうなると人々は「ほっとかして、竜蔵坊の言った事が本当なのでは？」と思う様になりました。利根川の水かさはどんどんふえていきます。明日は正月という日

「にげろ——。」

「にげろ——。」

使いが家々をまわりました。人々はとるものもとりあえず、少しでも高い土手へと逃げました。土手では、竜蔵坊が、ずぶぬれになりながら数珠を手にし大声でお経を唱へ土手の上を、いったり来たり走り続けていました。土手へ逃げて来た村人達もこれをみて口々に「なむあみだぶつ。なむあみだぶつ」を唱へました。水かさはどんどんふえ続け、とうとう土手を越えて千手院の森へ流れこみはじめま

した。まもなく土手はくずれてしまいます。その時、竜蔵坊はさっと身をひるがえして、トウトウと渦まき水の中へとびこみました。村人達は息をのみ、この様子を見ていました。すると、竜蔵坊が飛びこんだ所から突然大きな蛇がうかび上り、今まさにくずれおちようとしている土手の上に、しっかりと、ねころびました……。もう水は土手を越えなくなりました。不思議なことに水の勢もしだいに静かになり村人達もほっとし、胸をなぞおろしました。気がついてみると、土手をまもり、村人をまもり、千手院をまもってくれた大蛇の姿は、土手の上にはありませんでした。その後、村人達は相談をして、村を救ってくれた竜蔵坊の恩を忘れないため、竜蔵権現として塚の上になつりこの塚を権現山と呼ぶ様になりました。

